

文末表現「デショウ」の確認の 機能が持つ丁寧性

ハン ウォン ヒョン
韓 援 炯

1. はじめに

従来、文末表現デショウは「だろーでしよー」と対比させ「ぞんざいー丁寧」の形で説明されてきた。これはデショウを用いると丁寧な表現になるということである。しかし、実際の会話の中で使われているデショウを見ると、デショウを使ったことで丁寧になるとはいえない場面がよくある。

本稿では、ダロウとデショウを分離させ、デショウだけを考察の対象とする。これはデショウが持つ丁寧性、すなわち、デショウを用いることですべてが丁寧な表現になるのかどうかに注目するためである。

また、デショウが持ついろいろの機能のうち「確認の機能」¹だけを対象にし、デショウが「確認の機能」で使われるとき、そのデショウに丁寧性があるかどうか注目し考察することが目的である。

2. 従来の考え方ー文末表現デショウが持つ丁寧性

文末表現デショウは「だろーでしよー」の比較で、デショウはダロウの丁寧の形として扱われてきた。デショウを用いることでその表現は丁寧な言い方になると説明されてきたのである。

次の例文を見よう。

- (1) (テレビの天気予報でアナウンサーのコメント)

「明日は雨が降るでしよー。」

- (2) A「恭子さんだって恩人ですよ……。親父の命を救ってくれたんですから」

¹ デショウが持つ機能については、韓援炯 (2006)「文末表現ダロウが持つ機能について」を参照

B「そういえばお父さま、最近どうしてるの？」

A「まあ、あんなことがあったあとですからね、政治家としてはもうおしまいでしょうけど、思ったよりサバサバしてますよ」

(ラブレポリユーション)

例文(1)は、あるテレビの天気予報でアナウンサーが「明日は雨が降る」ということを視聴者に知らせる場面である。天気予報だと、発話の対象になる視聴者は不特定の人物になるから、アナウンサーが丁寧な言い方をとるのは礼儀として当然のことである。

また、(2)のAは、Bに対して「～恩人です。～くれたんですから」と「～あとですからね、～サバサバしてますよ」などの「～です・～ます」を用いて丁寧な言い方をとっている。それで、中に用いられている「～おしまいでしょうけど」の「でしょう」は当然丁寧な言い方である。

以上のように、今まではデショウが用いられると丁寧な言い方になるという扱いが一般的である。

3. 「確認の機能」を果たすデショウは丁寧を表さない

本稿で考察するデショウは、デショウが持つすべての機能を対象にするのではなく、「確認の機能」だけを対象にするが、これは「確認の機能」を果たすデショウには丁寧性がないことに注目するからである。

以下、文末表現デショウの「確認の機能」について簡単に触れる。

3. 1. デショウの確認の機能

文末表現デショウの「確認の機能」とは、日常生活でよく使われている「～でしょ？」と相手に対して何かを確かめる表現で、一言でいうと、話し手が聞き手に話し手の知っていることを聞き手に同意を求める表現である。

次の例文を見よう。

(3) A「でも、そうはいかないんだ。あなた、お兄ちゃんに父親殺されて

て、復讐のために私に近づいたんでしょ。そうなんでしょ？」

優子はリョウに詰め寄った。

B「……違う」

A「……ウソ。だったら、なんでいきなり私の前からいなくなったりしたの？」

(空から降る一億の星)

(4) A「友だち？」美羽は聞き返した。

B「ああ、女のともだちくらいいるよ。いない？男ともだちくらい居るでしょ？」

A「あんま、いないけど……」

美羽は小さくつぶやいた。

(空から降る一億の星)

(3)は、「復讐のために近づいた」という事柄について、すでに話し手はそう思っていて聞き手が本当に「復讐のために近づいた」かどうかを確かめている。「復讐のために近づいた」という事柄は、話し手はある程度の確信を持っているが、復讐するかしないかは話し手ではなく聞き手に属する事柄であるから、聞き手にそれを確かめるわけである。

また、(4)も同じく、「男ともだちがいる」という事柄についてBは、当然Aに「男ともだちがいる」と思ってAに確かめているのである。

このように、話し手がすでに知っているある事柄について、聞き手に確かめるときデショウを用い、このデショウの働きを「確認の機能」と呼ぶ。

3. 2. デショウは丁寧を表さない

従来、文末表現デショウは丁寧性を持ち、デショウを用いると丁寧な表現になると説明されてきた。しかし、実際使用されている場面を見ると、デショウを用いても丁寧にはならない場合がある。特にデショウが「確認の機能」を果たすとき決して丁寧とはいえない表現が多く見られる。

本節では、デショウが「確認の機能」を果たすとき、その表現が丁寧である

4 専修国文 第79号

かどうかを例文を見ながら説明する。

3. 1. の例文(3)と(4)に加えて次の例文を見よう

(5) A 「……どうしても帰るのか」

B 「帰るよ」

あたしは間髪容れずに答える。

A 「……俺が帰るなって、言ってもか」

B 「なんでそんなことが言えるの？ あんなことしといて……哲平、そんなこと言えた義理じゃないでしょう」

A 「言っただろう。俺はあの晩は水原とは何もしてないって……」

また、同じことの繰り返し。

B 「言い訳はやめてよ！」

(ラブジェネレーション)

(6) そう言って真理子を椅子から立ち上がらせようとした須賀の体に腕を回すと、真理子は須賀のワイシャツの襟元に唇を思い切り押し付けた。

A 「ちょっと真理子さん、なにしてるの!？」

須賀のワイシャツにべったりと着いた口紅の跡を満足そうに見やりながら真理子が言った。

B 「これではかの女は呼べないんだから。私につき合いなさい！」

須賀はフーッとため息をつく、椅子に座ったまま自分を見上げている真理子をさとすように言った。

A 「あのね、真理子さん。こんなの誰が見てもイタズラでつけた口紅でしょ。ちっともリアルじゃない。なんの効果もないって、わからない君じゃないでしょう」

B 「理屈はいいの。ほら、座って」

(ラブレボリューション)

例文(3)のAとBの発話を見ると、デショウは別にしても、「～違う」と「～いなくなったりしたの？」の言い方は相手に対する丁寧は入っておらず、ぞん

ざいであることは確かである。(3)のAとBはぞんざいな言い方で話し合っているといえる。

(4)も、「～いるよ。いない?」「～いないけど……」の言い方をみるとぞんざいであることがわかる。同じく、(5)の「～帰るのか」「帰るよ」をみても、(6)の「～なにしてるの!?!」「～ないんだから。」をみてもこれらの言い方がぞんざいであることは間違いない。

また、話し合うA・Bの関係を見ると、(3)は付き合っている男女の関係、(4)は親しい友達の関係、(5)は恋人の関係、(6)は親しい友達(恋人までにはなっていない)の関係である。友達・恋人などの関係では、互いに使う言い方は丁寧ではなくぞんざいな言い方をとるのが一般的である。これは話し手と聞き手はぞんざいな言い方をとってもいいという親しさを表すからである。

このように、(3)～(6)のAとBの互いに用いる言い方はぞんざいであることが分かり、そこに用いられるデショウは(ぞんざいな言い方に丁寧な言い方を交ぜることはありえないから)ぞんざいな言い方であるのは明確である。

ならば、なぜ、「確認の機能」を果たすデショウは丁寧性を持たないのか。

デショウの「確認の機能」とは、話し手がある情報についてすでに知っていて、その情報を聞き手に確かめる働きである。が、聞き手に確かめるとはいえども、話し手は、その情報はほぼ確実であると思い込み、聞き手はそれに同意さえすればいいと思っているわけである。同意さえすればいいという話し手の聞き手に対する行為は、聞き手のことは考慮しない話し手勝手の思い込みであるから、相手(聞き手)が目上の人などで丁寧な言い方をとるべき場面では、失礼になり、使用しがたくなるのである。

したがって、話し手が聞き手に対して「確認の機能」を果たすデショウの使用ができる場面は、聞き手が親しい関係などでぞんざいな言い方を使ってもかまわない関係のときである。

以上のように、デショウが「確認の機能」を果たすとき、デショウが用いられる表現は丁寧な言い方ではなく、むしろぞんざいな言い方であることが分かる。従来の「デショウ」を用いることでその表現が丁寧な言い方になるという

説明は、この場合には適応できないのである。

4. おわりに

従来、文末表現デショウは「だろーでしよ」と対比させ「ぞんざいー丁寧」の形で説明されてきた。デショウの使用でその表現は丁寧性を持つということであるが、本稿の考察で、「確認の機能」を果たすデショウが用いられる表現は丁寧な言い方ではなく、むしろぞんざいな言い方であることが分かる。

最後に、今回の考察で分かった点であるが、解決できなかったところを簡単に記す。

4. 1. デショウの形態

日常会話の中で使われているデショウをみると、特に「確認の機能」として使われる場合、「でしよ」の変わりに「でしょ」と音を短くする現象がよく見られる。本節のデショウの形態とはこの音の形態のことで、ある話し手が発話するとき「でしよ」と後ろの音を長く伸ばすか、または、「でしょ」と後ろの音を短くするかとのことである。

これについて例えば、森山卓郎は、

形態としても、ダロウ(口語的に短くなればダロ)のほかにデアロウ、デショウ(口語的に短くなればデショ)、デアリマショウといった形がある。²

と、音の短いほうが「口語的」とであると説明している。音の長さによるその他の違いはないということであろう。

また、例文調査の資料として扱った本³(以下『本』と呼ぶ)と放送されたドラマ⁴(以下『ドラマ』と呼ぶ)を比較してみると、文字表記上の音と音声

² 森山卓郎、1992、「日本語における「推量」をめぐって」、『言語研究』101号、三省堂

³ シナリオとは別に、実際にテレビ番組で放送されたドラマをもとに文字化し、さらに小説化したもの

⁴ 放送されたドラマとは、テレビ番組で放送されたドラマのことで、音声資料のことである

上の音の長さが一致しないところがたまたま見られる。例えば、『ドラマ』では短い形で発話されたセリフが『本』では長い形で載っていたり、逆に、『ドラマ』では長い形で発話されたセリフが『本』では短い形で載っていたりするような揺れが見られる。このことから、「でしょう」と「でしょ」はその働きはまったく同じもので、両者は自由変異であると解釈してもいいだろう。

本稿も、基本的には「でしょう」と「でしょ」の二つの形態を同じものとして扱ったが、その二つの間に何かの使い分けがあるのではないかと思われるところもある

例えば、相手による使い分けで、相手が親しくない関係の人であるとき「でしょう」の使用が見られるが（これは丁寧ではなく、相手と親しくなりたい気持ちの表現であると思われる）、「でしょ」の使用は見られない。が、相手が親しい関係の人である場合は「でしょ」の使用が一般的であるが、「でしょう」も見られる。この相手による使い分けは単に見られる現象で、実際そうであるかどうかについては今の段階では何も述べることができない。もし、「でしょう」と「でしょ」の音の形態による違いが実際あるとすれば、これについて考察する必要があるのではないかと思う。

4. 2. ジェンダーと形態の問題

本稿では「確認の機能」を果たすデショウだけを対象にしたが（ダロウは対象外であったが）、デショウとダロウを比較してみると、男女による使い分けが見られる。

例えば、デショウは男女ともに使用が見られるのに対して、ダロウは男性のみ使用が見られることである。（が、男性のダロウの使用も、相手が自分より下の立場などの限られた場合のみその使用が見られる）女性の場合はダロウの使用は見られず、男性のような使い分けはないようである。

以上の点についてこれから考察することで「ダロウーデショウ」についてもっと詳しいことが分かると思う。

〈参考文献〉

- 紙谷栄治、1995、「助動詞「だろう」について」、『関西大学文学部創設七〇周年記念特輯』、関西大学文学会
- 金水敏、1992、「談話管理理論からみた「だろう」」、『神戸大学文学部紀要』、神戸大学文学部
- 仁田義雄、1991、『日本語のモダリティと人称』、ひつじ書房
- 韓援炯、2006、「文末表現ダロウが持つ機能について」、『文研論集』47号、専修大学大学院
- 三宅知宏、1993、「派生的意味について—日本語質問文の一側面—」、日本語教育79号
- 三宅知宏、1995、「「推量」について」、『国語学』183号
- 宮崎和人、1993、「「～ダロウ」の談話機能について」、『国語学』175号
- 宮崎和人、1995、「「～ダロウ」をめぐる」、『広島修大論集』第35巻第2号（通巻第66号）人文編、広島修道大学人文学会
- 森山卓郎、1989、「コミュニケーションにおける聞き手情報—聞き手情報配慮非配慮の理論—」、『日本語のモダリティ』、仁田義雄・益岡隆志、くろしお出版
- 森山卓郎、1992、「日本語における「推量」をめぐる」、『言語研究』101号、三省堂

〈例文引用〉

- 『空から降る一億の星』、2002、北川悦吏子、角川書店
- 『ラブジェネレーション』、1997、浅野妙子 尾崎将也、フジテレビ
- 『ラブレボリューション』、2001、藤本有紀、フジテレビ